

120人へのフィードバックを可能にする "フィードフォワード"

2016年度秋学期ティーチングアワード受賞
対象科目：Law and Economics 01

イギリス・エディンバラ大学で9年間にわたって専任教員を務めた河村教授は、帰国後初年度に総長賞受賞という快挙を成し遂げた。学生から高い満足度を得た理由のひとつに、レポートのきめ細かなフィードバックがある。それを可能にしたのは、レポートで求められていることを事前に周知させる「フィードフォワード」だ。



河村耕平

政治経済学部教授

レポートに求める要素を 事前に明示する

この科目は、政治経済学部の英語学位プログラムに設置されたものだ。120名程いる履修生のほとんどは外国人留学生で、大教室で講義を行う形で行われている。

「講義の進め方は極めてオーソドックス」というが、力を入れているのはレポートのフィードバックだ。全員に数行のコメントを返すほか、採点後の授業時間外にひとり10分ずつ設けている予約制のフィードバックセッションにも多くの学生がやってくる。履修生が多くてもこのような双方向な対応が可能なのは、ライティングの手引きをA4サイズで3枚程度にまとめて事前に提示していることによる。

「通常学生たちは、一般的なレポートの書き方を学ぶ機会はあるけども、経済学に特化した指導を受けることはありません。経済学では雄弁に語るよりも言いたいことを簡潔に述べていくのが大切。経済学のレポートや論文に求められているものをきちんと伝えたかったのです」。

手引きで示しているポイントは3点ある。1.問いにしっかり答えること、2.簡潔明瞭に述べること、そ

して 3.その授業で学んだことを示すこと。

「ありがちなのは、課題に関係ありそうなものを詰め込んではいるけれど、例えばYes か No かの問いに対して結局YesなのかNoなのか答えていないというケースです。そこが曖昧では意味がないことを理解してもらいます」。

さらに、どんなに説得力があっても、その授業で学ぶべき内容と離れていてはダメだと強調する。レポートでは何が求められており、どんな基準で評価されるのか。それをあらかじめ明確に伝えておくことを重視するのは、求められていることが分からないと、自分が何をやっているのか、何が良く、何に改善の余地があるのか分からず、学習効果が上がらないと考えるからだ。

基準を示しておく フィードバックが楽になる

このことにより、レポートの質向上だけでなく、個別にフィードバックする教員側の負担軽減効果

もあるという。

「これを僕はフィードフォワードと呼んでいます。前もって提示した客観基準に照らし合わせて評価すればよいので、フィードバックを与える側の負担を軽減することにもなります」。

個別に質問に来る学生たちも、どこが基準に合っていないのかを指摘されると腑に落ちてすんなり納得するようで、次のレポートへの改善につながっていると感じている。

この手法を思いついたのは、河村教授自身が学生時代に感じたことからだという。「一生懸命書いたのに評価が低かったり、そうでもないのに高かったりすることもあり、何を求められているのかが分からなくて不満でした」。

そこでエディンバラ大学在任中、学部1年生向けに経済学におけるエッセイ・ライティングの指針を作成。「イギリス人のエリート中高出身の学生が授業と関係ないが議論だけはもっともらしいものを書いてきたときも、求めているものとは違うのだと跳ね返すことができます。そうもしないと、ライティングそのものに自信のある彼らは低評価に納得しませんから」。

このとき作成した指針は、河村教授が退任した現在も同大の経済学専攻の学生全員に配布されているという。

いわゆる「マニュアル」を作成することについて、年配の同僚からは否定的な声もあった。しかし、ここで示すのはレポートの構成だけという点がキーだ。「内容について何を書けとは一切言及しないし、あえて例も示しません。ライティングの骨格のところは教えてあげて、中身は自分で埋めさせることで効果が上がると感じています」。

学生に知的刺激を与えるような授業がしたい

今後の抱負としては、「もっと雑談を充実させた授業をしたい」と語る。

「大学での勉強の基本は自主学習。雑談も含めて、何かおもしろそうだから授業に行き話聞いて、この先生が言うならきっとおもしろいだろうと思って、自分で勉強してくれるのが理想です」。

教養課程がなく教養は自分で身に付けるものとされているイギリスでの経験から、早稲田の学生にも、専門科目を教えながら文化や芸術にも意識が向くという雰囲気を作りたいと考えている。

「経済学の学生にも、オペラや絵画、文学、演劇に触れるなど豊かな文化体験をして欲しい。そういったことは科目としてやるよりは、先生が何かおもしろいこと言ってたな、変なこと言ってたな、というようなことの方が刺激になると思うのです」。

国際的に通用する人材を早稲田のカリキュラムの中でしっかり育成することは大事だが、それは教育内容の標準化、画一化につながり得るとも危惧する河村教授。早稲田の良さは多様性にあり、他の大学と同じになってしまっただけではつまらないと感じている。

「授業中みっちり科目内容を教える先生もいれば、雑談の多いすこし不真面目な先生がいてもいい。僕自身も早稲田での学生時代に先生の雑談も含めて様々な刺激を受けたことが、現在の研究者としてのオリジナリティにつながっていると感じています。今回の受賞で当面の免罪符をいただいたようなものでしょうから（笑）、自分も学生に知的な刺激を与えられるように、いろいろなボールを投げたいですね」。

【講義概要動画】「Law and Economics 01」

<http://course-channel.waseda.jp/contents/C0000007164/>

